

## 残された紙おむつ

〈山口県〉 土田 葉子 つちだ ようこ  
50歳

夫がくも膜下出血で倒れたのは、一昨年の11月。搬送先の病院で直ちに「残念ながら、もう二度とお話することはできません」と、宣告された。

のがあるんですけど」

入院から4日目のことである。とても気さくな、でも失礼でない話し方をする看護師さんに言われた。

私は、あまりの突然の出来事に、何が起きているのかがまるでのみ込めなかった。裂けた血管にコイル

「お酢と紙おむつと介護用の歯ブラシね。お酢はね、点滴の消毒に使うんです」

を詰める手術だけは、なんとか行うことができたが、厳しい状態に

彼女の穏やかな明るさが、私の気持ちを和ませてくれた。

変わりはなかった。あと何日持つてくれるのか。夫の呼吸が止まった時に、果たして私は彼の死を受け入

「ご主人、経管栄養を始められまし、便もされているし。いい状態ですよ」

れることができるのだろうか。その瞬間が来ることを想像すると、怖くてたまらなかった。ただただ夫の手を握りしめるしかなかった。

「土田さん、買ってきてほしいも

いや、そんなことはない。夫は助かる見込みはないと言われたのだ。でも、私は看護師さんの言われた品物を薬局で選びながら、なぜか心が弾んだ。夫の看護をしている

ような気持ちになったからだ。夫の死をただ待っているのではない。看護をしているのだ。そう思えて、少しでもだけ気持ちに張りが出た。そう、歯磨きをしてもらって、気持ちのいい紙おむつを履いてもらおう。そう考えた。

その2日後に、夫は静かに息を引き取った。紙おむつ7枚だけを使つて。

今は、最後の看護に気持ちを向かわせてくれてありがたかったと、あの時の看護師さんに伝えたい。